



□ フォト・エッセイ □

フィリピン障害者の エンパワメント

— マニラ首都圏での 障害者調査を通じて —

写真文
森壯也・山形辰史
Soya Mori・Tatsufumi Yamagata

手話によるインタビューを見つめる子ども

● 障害者の貧困

開発途上国の抱える最大の問題は言うまでもなく貧困である。その大きさの陰で、障害者の貧困は福祉の問題とみなされ、国際開発の文脈に、きちんと位置づけられなかった。途上国の障害者が街角で物乞いをしていても、障害者だから仕方ないとか、途上国では福祉が遅れているから当然だ、というような感覚で見られがちであった。

しかし、途上国の障害者も皆、貧困状況を甘受しているわけではない。機能的な障害はあっても、当事者団体を率い、近隣コミュニティと交流を持ちながら生きていく術を仲間に教え、政府やNGOとの交渉の前面に立って、障害者全体の生活改善に努力する人たちもいる。非障害者に雇ってもらえなければ、仕事も自分たちで作出す。

● フィリピンの障害者法

フィリピンでもそのような取り組みに努力している人たちがいる。同国には一九九〇年代半ばに成立し、アジアでも先進的と評価される「障害者のマグナカルタ」という障害者法がある。しかし政府はその実行を長らく怠ってきた。ところが二〇〇六年に国連で障害者の権利条約が成立すると、政府は驚くべきことに、いち早くこれを批准した。さらに、それまで障害者関連政策の政府内の調整機関に過ぎなかった国家障害者福祉協議会を大統領直属



路上で物乞いをする障害者



盲またはろうの障害者リーダーたちとのミーティング



フィリピン障害者の若きリーダーであるマンラパス氏

マカティ市清掃職員として雇用されているろう者へのインタビュー

の国家障害協議会として改組した。またマダナカルタの修正も行われ、従来、高齢者にも適用されていた公共交通機関や医療、レストランや宿泊施設などの割引措置が障害者にも認められるようになった。

この法律の施行は、フィリピンの障害者にとって、事実上初めての貧困緩和策となった。障害ゆえに、それが無ければ得られたはずの所得機会を失うと共に、非障害者以上の支出を強いられる障害者の貧困は、非障害者の貧困の条件と同じ物差しでは測れない。途上国において障害者は、貧困者の中の貧困者という立場を甘受してきた。そうした状況に対し、資源を持たない多くの途上国の政府は、なす術がなかった。しかしフィリピン政府は同じ状況に直面しつつも、政府予算の直接支出増ではなく、マダナカルタの修正による諸料金割引導入によって、障害者の貧困緩和を試みたのだ。

しかし、この対策も万能薬ではない。法改正の周知が遅れているうえ、割引措置を受けるために必要な障害者IDカードの発行も遅れている。さらに、途上国に共通する政府の非効率性の問題が、マダナカルタに盛り込まれた政策の実現を妨げている。

●フィリピン障害者調査

このような障害者の貧困問題は、政府統計では把握されていない。これを明らかにするためには、障害者の生活状況を調査する必要がある。そこでアジア経済研究所



マカティ市からレンタルしたWheel Mobile車



トーキング・ブックを用いた視覚障害者へのインタビュー



Wheel Mobileに乗って目的地へ

は、二〇〇八年の夏、フィリピン開発研究所 (PIDS) と協力し、マニラ首都圏における障害者の生計調査を行った。

障害者調査はフィリピンでもいくつかの事例があるが、我々の調査には画期的な点が二つあった。それは第一に、日本とフィリピンの開発研究機関の協力によっているということである。第二に、フィリピンの障害当事者団体の協力を得、障害当事者を調査員として採用したことである。本調査は、両国の開発研究者と障害当事者が相互に相手の立場・経験を学び合う、「開発」と「障害」の出会いの場ともなった。

こうした調査を行うためには、事前の入念な計画はもちろんのこと、調査の直前に関係者全員を集めての数日間の研修と打ち合わせが必要だった。研修は、調査それ自体についてのみならず、障害についても多くの時間が費やされた。その際、常に念頭に置かれたのは、メインストリーミングとエンパワメントという二つの観点である。

メインストリーミングとは、社会で障害者についての関心や配慮を広げていくことで、障害者を社会の様々な場面に登場させていくことにより実現される。そのために、例えば移動性障害の人たちには移動手段を、そしてコミュニケーション障害の人たちには情報伝達手段を確保することが必要である。本調査では、肢体不自由障害者の移動のために、ホイール・モバイル (Wheel Mobile) とし、マカティ市が寄付で得た、



パサイ市の街中の当事者宅での障害者によるインタビュー



マカティ市のバラングイ・ホールでの障害当事者によるインタビュー



ヴァレンズエラ市のゴミと水の滞留する地区に住む障害者宅にも足を運んだ

車椅子利用者運搬用自動車を借り上げた（写真参照）。さらに情報伝達手段として、盲人にはトーキング・ブックという文書の音声読み上げ機器、そしてろう者と聴者のコミュニケーションのために手話通訳が採用された。当然そのために一定の費用はかかったが、費用に見合う以上の成果と社会的な意義があったと考えている。

もう一つの観点のエンパワメントとは、障害者たちが持つ力を発揮させることを指す。調査員の中には、全ろう、または全盲、さらには重度の肢体不自由の障害者もいた。彼らが、PIDSの若い調査員たちとペアを組んで、見事に、そして積極的に、調査員としての役割を果たしてくれた。インタビューは、予定時間を遙かに超え遅くまで続くこともあった。また歩いて通るのすらも難しいような路地裏まで、車椅子で入っていくこともあった。障害者調査員たちの行動力は驚くべきものだった。それぞれが、この調査に参加することを通じて、自分の世界が、日常の活動の範囲を超えて広がったことに大きな満足を感じていた。

調査からは、マニラ首都圏のような都会でも、障害者が貧困である割合が依然として高いことがわかった。研究結果は今年中にはアジア経済研究所から出版される予定である。乞うご期待！

（もり そうや・やまがた たつふみ
／アジア経済研究所新領域研究センター）